特集　地域の中の「コミュニティデザイナー」はいかに生まれるか

《3》横浜でつながりを創る人々に伺う

② 新しいスタイルのアンテナショップ「kura-cafe（クラカフェ）」を開設「重要なことは、場を提供すること」

本市職員としての経験が貴重な財産に

学生時代はやる気を外に出すのが苦手で、まちづくりやボランティア活動に積極的に取り組むことはありませんでした。大学院を卒業した後、唯一合格した横浜市に入庁しました。

入庁後は鶴見区地域振興課で「多文化共生事業」を担当しました。鶴見に住む30人に1人は外国籍の方で約80か国の国籍の方が住んでいます。鶴見区は外国人への言葉の支援や交流活動を熱心に行っていました。私は平成22年の鶴見国際交流ラウンジの開設を準備段階から担当しましたが、この業務は色々な意味で学びの多いものでした。

まず、外国人支援をする市民の方との出会いです。専門的な知識やネットワークを持ち、現場のニーズを把握していました。実りある施設をつくりたいという彼らの情熱に影響を受けました。

次に、専門家、市民、外国人当事者、行政など、異なる立場の人が知恵を持ち寄って新しい場を作るプロセスです。地域の様々な団体が同じテーブルで話し合い、具体的に調整し一緒に汗を流すようなプロセスを重ねることで、実りある場ができていく実感がありました。

最後に、中国や南米出身の日系人との出会いです。彼らと付き合いライフストーリーを聞いていると、まちに住む人こそがまちの魅力をつくることを実感しました。

この時期の経験はまちづくりに関わる上で貴重な財産になっています。

行政の役割に対する迷い

しかし、その後の業務を行うなかで、「これは行政主導で行うことなのか」と疑問を持つことが多くなりました。行政は全体の奉仕者として公平・公正が求められ、特定の課題に対してのみ深入りして支援したり、プレイヤーとして実践することが難しいです。行政職員として自分のやっていることが正しいのか、何が正しいのか、日に日にわからなくなりました。

そして、24年度の後半には、「地域で一プレイヤーとして現場に近い仕事を思いっきりやってみたい。」という気持ちが膨らみ退職を考えるようになりました。

コミュニティカフェという着想

この時期、新たな住まいへ引越し、近くの弘明寺商店街を歩いていて、ふと、地域に住んでいる人が集まり活動が楽しくおこるカフェのような場所があれば面白い、と思いつきました。

その後勉強してみると、カフェという形をとりながらまちづくりの拠点にもなっている「コミュニティカフェ」の存在を知りました。港南台にある港南台タウンカフェにも出入りし現場で汗をかく先輩や仲間に出会いました。行政職員としての経験も活かすことができると感じ、商店街にコミュニティカフェをつくることを次の目標に横浜市を退職しました。

弘明寺商店街から、つくの商店街へ

退職してまず取り組んだのは弘明寺商店街の各店舗を紹介するブログでした。猿のぬいぐるみが主人公となり各店舗を紹介するもので、取材を通して商店主と関係をつくることが狙いでした。ぬいぐるみをもってあらわれる私を商店主は温かく受け入れてくださいました。自分から飛びこみ相手との関係をつくっていくことを学んだ時期でした。

しかし、その年の6月、思いがけない展開がありました。人事交流職員として鶴見区で一緒に働いていた福島県棚倉町の職員から連絡があり、東日本大震災の風評被害で苦しんでいるので物産品の販売拠点を鶴見の商店街に作りたい、手伝ってもらえないかというものでした。商店街

中村　郁子さん

2013年10月に鶴見区つくの商店街にアンテナショップkura-cafeをオープンし、店長を務めている。

鶴見区の友好都市である福島県棚倉町・西会津町との関係を中心に、全国の小さなまち・むらのファンづくりを応援するアンテナショップとして取り組んでいる。

kura-cafeスタッフの皆様（左端が中村さん）

聞き手

野崎　貴之
鶴見区区政推進課地域力推進担当係長

中盛　敦司
市民局地域活動推進課担当係長

に場をもちたいと考えていた私にとって願ってもない話でした。

この話はその後、鶴見区地域振興課、鶴見区商店街連合会（以下「区商連」という。）の力をお借りし、具体的に進んでいくこととなりました。

まず、区商連との話し合いで販売拠点としてつくの商店街の空き店舗を活用するという案がでて、同時に横浜市経済局の商店街空き店舗活用アンテナショップ事業の助成金を活用できる可能性があることがわかりました。港南台タウンカフェを運営する株式会社イータウン代表取締役の斉藤保氏にも相談した結果、人の交流を中心に被災地をはじめとする地方のまちを応援する拠点をつくる構想ができ、株式会社イータウンが運営するアンテナショップkura-cafeが２０１３年10月にオープン、私は店長として関わることになりました。

kura-cafeのオープン

kura-cafeのミッションは３つです。全国の小さなまち・むらのファンをつくりまちづくりを応援すること、地方の生産者と都会の消費者をつなげること、地元の鶴見の活性化に貢献することです。ものの交流から人の交流を生み出すことを目指し、特産品販売、情報発信、交流イベントや現地ツアーを行っています。

場はどんな形態でも構わない

kura-cafeでの活動を通し場を提供することの可能性を感じています。運営する人の志次第で一つの場が地域に確かなコミュニティを作りだします。「商店」でもやり方次第で確かにコミュニティづくりに貢献できます。

実は当初はコミュニティカフェをやりたかったのにアンテナショップになったので戸惑いました。しかし、今ではそういう区分けは重要ではないと思っています。人と人とをつなぎたいという志で運営していれば、どのような形態・業種であっても構わないと思います。

kura-cafeは地方のまちに住む住民や農家の方と都会に住む消費者をつなげています。また、鶴見に住む人たちどうしのつながりも作りだしています。私たちは商品をつくるのも人、商品を買うのも人、商品のやりとりの間に入るのも人、というスタンスで店を運営しています。大量消費社会の流通システムの中で忘れがちになるこの当たり前のことに丁寧に向き合い、新しく出会いの価値を生み出したいと考えています。

人と人をつなげる時意識していることは無理強いはしないことです。人に変化を押しつけることはできないので、きっかけを提供し、あとは無理強いをしません。きっかけは提供すればさらに出会いを求める人は自らの意思で進んでいきます。

鶴見に関わり続けたい

初めて仕事をした鶴見にkura-cafeの店長としてまた戻って来ることとなりました。思い入れの強いこの街の活性化に今後も関わっていきたいです。

コミュニティデザイナーを名乗るにはまだまだ未熟です。まずはkura-cafeの経営をしっかり安定させ、地域に根差した店として継続して活動をし続けることを大事にしたいです。いずれはまちのコーディネーター役として職業として自立し、さまざまな分野でお役にたてるようになりたいです。

【インタビューを終えて】

人と人とをつなげる時、積極的に結び付けるのではなく、無理強いせず、場の提供に留めるということがインタビューを通して強く印象に残る話でした。中村さん自身、周囲から「広場みたいな人」と言われるとのことですが、まさに人と人とがつながる場の存在が重要なのだと思いました。また、中村さんのような取組が広がっていくためには、職業として成り立つことが必要ということは、これまで、あまり意識してこなかったことであり、認識を新たにすることとなりました。（野崎）

日常生活を送っていると様々な場面の中で、人との出逢いがあると思います。中村さんと、会話をしていると地元だけでなく、仕事の仲間や地方の人々など様々な人達が登場し交流を図ることで、人々の絆が深まっていることに気づきました。

現代社会では人との係わりが希薄と言われがちですが、これからもkura-cafeを通じて一人でも多く新たな出逢いが生まれることを期待しています。（中盛）

kura-cafeの外観